
アンタの側に

来実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アンタの側に

【Nコード】
N3245I

【作者名】
来実

【あらすじ】

平次と和葉の日常です。和葉の目線で書いてます。最後は、和葉らしく前向きです。

今日は土曜日で、午前中だけ学校があつたん。

平次は依頼で帰ってきたのが朝方だったから、学校はお休み。そんなで、学校が終わる頃アタシを迎えに来る言つとった。

「またね和葉！」

「ほなな〜」

学校が終わってちょっと友達とおしゃべりしてから、駆け足で校門に向かった。…けど、校門に平次の姿を見つけたにも、関わらず、少し離れた所でアタシの足は止まってしまった。

平次が、女の子たちに囲まれていたから。

そこには、同学年は勿論、先輩後輩もいて、楽しそうに笑ってて。アタシは改めて、平次がモテるのを実感してしまった。

アタシはしばらく、動けずにいた。平次の側に行くのが、何となくうしろめたくて。

あんなにカッコよくて、人気があつて、モテてるすごい人の側に、アタシがいてイイのかな…なんて思ってしまった。

ただの幼馴染なのに。幼馴染ってだけで、平次の隣を占領している…。

なんだか、自分がずるいような気がして……

「和葉！んなどこで何しとんねん！はよ来い！」

平次がアタシに気づいて、囲まれている中から呼んだ。女の子たちの視線がアタシに集まる。それでも、呼んでももらえて、ほっとしている自分がいた。

とりあえず、平次の所に駆け寄る。

「ごめんなあ！　ちよつと考え事しとつてん」

「やからつて、あんな道のと真ん中で止まんなやアホ」

平次はスルつと、いとも簡単に女の子たちの所から抜け出してきた。女の子たちの『えー』とか『あゝん』という悲鳴みたいな声が聞こえる。

「アホアホ言わんといて」

「一回しか言うてへんわ」

女の子たちの面白くなさそうな視線を浴びる。いかにも、『あんた誰』って顔をしている。平次のおっかけなら、アタシの顔くらい覚えていそうな気がするけど、多分いつも平次しか見えてないんだろう。

「ほら、はよかぶり」

「ありがとう」

そう言つて、ヘルメットを受け取つた。

平次がバイクにまたがる。あたしも、それにならつた。ただ女の子たちの目が気になつて、いつもみたいに平次にしがみつけない。

それに気づいた平次がアタシの手を、無理矢理自分のお腹の所にもつてきた。

「ちゃんとしがみつかんと、落ちるでえ？」

平次は悪戯っぽく笑つて、アタシの手を前で組ませた。それによつて、アタシは平次に後ろから抱き着くみたいな形になる。

女の子たちの顔が、明らかにいらつとしたのがわかる。ついに、先輩と思われる人が、平次に声をかけた。

「服部君。その子服部君の何なの？」

「和葉か？…そやなあ…」

平次はちよつとだけ宙に目を泳がせた。どうせただの幼馴染って言つてしまつてんやけど。

「和葉、深くヘルメットかぶり」

「へ？」

口を開く間もなく、がぼつとヘルメットをかぶらされた。

「今日は機嫌イイさかい、あんただけにこっそり教えたるわ。和葉には、秘密やで？」

平次は小さな声で喋ってるのか、アタシにはよく聞こえない。平次にバレないように、こっそりヘルメットをずらした。

『こいつは、俺が昔っから大事にしとる女やねん。いつか絶対、捕まえたるんや』

…夢やと思った。

平次がそんなふうに通ってくれとったなんて。後ろからだから平次の表情は見えないけど、声の調子から多分、事件解いてる時と同じ、キラキラした顔をしとる気がした。

…あかんめっちゃ嬉しい。

思わず顔がにやけそうになる。でも、こけで顔を緩ませたら、聞いていた事がバレしてしまう。だから、そしらぬ顔で、

「平次い？よく聞こえへんねんけど。なんて言ったん？」

なんて言ってみた。

「お前は知らんでええ。そやな…1500年くらいしたら教えたるで？」

「なんやねん…。しかもどつかで聞いた事あるセリフやし」

「まあええやろ？そろつと行くで。海、行くんやろ」

「うん！」

嫉妬と羨望の目でみてくる女の子達を横目に、バイクは出発した。

しばらく、無言で走り続けて。

ふいに、アタシは口を開いた。やっぱりどうしても聞いてみたくて。

「なあ平次…。あたし、平次の側にいてええの？」

「いきなり何言いだすんや」

「せやかて、平次の周りいっぱい可愛い女の子おるやん。」

「あんな俺の事よく知りもせん女達とおるより、和葉とおる方がええわ」

「せやけど…」

「ええから。いらん事考えんと、側におったらええやん。それとも嫌なんか？」

「嫌とちやう。まあ、そやな。仕方あらへんから、アタシが側におつたるわ」

「えつらそーに…」

「なんか言つた!？」

「何でもありません」

なんか、悩んでたん馬鹿らしくなってもーた。
別に、幼馴染なん関係ないやんな。楽しいから一緒におるんやし？
女の子達に気イ使っ事ないねんな。

——俺が昔っから大事にしとる女やねん。いつか絶対捕まえたる
んや——

アタシはそう簡単に捕まってあげたりせえへんで？

アタシが平次捕まえたるんや！覚悟しとき♪

F i n .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3245i/>

アンタの側に

2010年10月28日05時20分発行